

わが青春の譜（十三）

山岡浩二郎

地域社会との融和

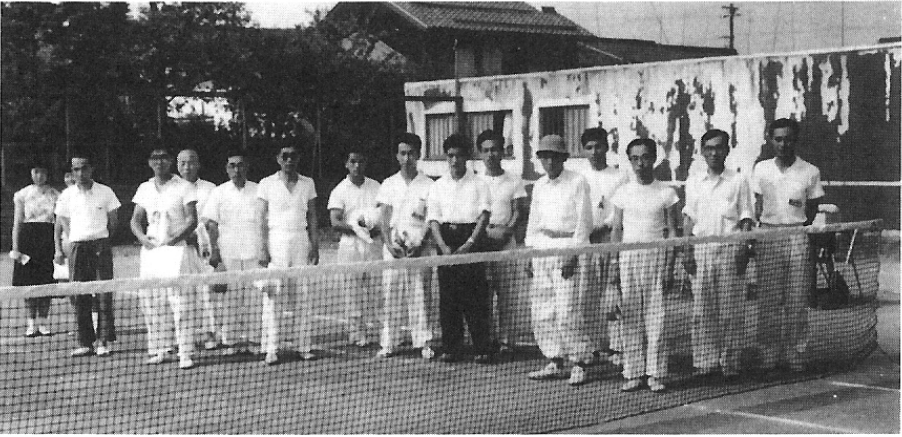
長浜のテニスコート

企業が地方で存続するのにもっとも大事なものは、何といっても地元の人々と友好と融和のきずなを結ぶことであろう。それが地域社会の発展にとつても、企業の発展にとつても、ともに欠かすことのできないたいせつな要件であることはいうまでもない。ヤンマーは初代孫吉社長が滋賀県湖北の出身ということもあって、戦後、会社が大きくなるにつれ、長浜を中心にした湖北一帯で果たす役割は必然的に大きなものとなった。

私は、終戦直後から、長浜工場をヤンマーの主力工場に育て上げるために踏ん張ったが、地域社会の復興と発展に役立つことであれば、労を惜しんではなるまいと、官公庁、団体、その他地元有力者の多くの方々と接し、行政ヤンマーデパートゼルサッカー部は昭和三十二年（一九五七）に創部した。

すでに述べてきたように、私は元来スポーツが大好きで、戦後海軍から復員して長浜工場に勤めるようになって行政面についても積極的に協力し、社会・文化・体育等の諸方面にわたって大いに援助してきた。なかでも、私自身スポーツが何より好きだったから、少ない余暇をやりくりしては、地方の行事にも参加、テニス、卓球等、愛好者の人々とプレーを通じて交わりを深め、仕事を離れて、プライベートな面からも心の通う友情を深めた。

中でも長浜は古くから軟式テニス（現在はソフトテニスという）の盛んな土地柄で、戦後、市に体育協会が創立されるや間髪を入れず庭球協会をつくろうという機運が高まり、昭和二十二年（一九四七）に長浜軟式庭球協会が設立され、私が初代の協会長に推された。



ヤンマーの私有地寄贈でできた初の長浜市民テニスコート



豊公園にある12面の長浜市民庭球場



前河敬造氏(右)と

一九四五年(昭和二〇)八月、第二次世界大戦が終結し、戦後の復興行政が進む中で、長浜市教育委員会の管掌の下に、ようやく公共的スポーツ機関として長浜市体育協会が創立された。

軟式庭球もこれに呼応し、既存の「長浜レーククラブ」「不惑クラブ」が中心となり、これに諸官庁はじめヤンマーディーゼル、鐘淵紡績、近江ベルベット等の実業団が加わって長浜庭球協会の創設が図られた。

初代会長には、当時から地域社会各方面で多岐に亘って協力され、また、スポーツ振興、とりわけ軟式庭球のため物心両面で多大のご厚意とご指導をお寄せ頂いていた山岡浩二郎氏を推載、めでたく一九四七年(昭和二二)、長浜庭球協会として弧々の声をあげることとなった。

といっても、その頃はテニスコートといっても学校の施設しかなかったもので、私は会員の要望に応えるべく、二十六年(一九五二)、当時、長浜市内高田町の長浜電報電話局の裏にあつたヤンマーの私有地を、テニスコートとして市教育委員会に寄贈することにした。のち電報電話局が拡張されることになってこのコートはなくなつたが、これを基礎として代替地をもらい、今では湖岸の豊公園のなかに十二面のりっぱなテニスコートができている。

私は長くこのコートを愛用し、テニスを通じてたがいの親睦の糧を求め、のちのちの思いの場としてもらいたいと願っている。幸い今日までは、現在協会の顧問をされている前河敬造氏が長年協会長を務められ、この趣旨の下に後輩を指導し、心血を注いでこの伝統を守つてきてくださった。だが、世が移り変わるにしたがつて、こうした経緯もいつのまにか忘れ去られるようになってきた。多少残念な気がしていたところ、平成六年(一九九四)一月になつて、同じ思いの前河氏が、「山岡浩二郎氏と長浜市民庭球場について」と題した銘板を、テニスコートのクラブハウスに掲げてくださった。

直ちに上部団体である長浜市体育協会並びに滋賀県軟式庭球連盟に加盟し今日に至っている。

勿論のこと、協会発足当時は協会としてのホームコートとなる施設はなく、会員全員が等しくテニスコートの新設を待ち望んでいた。こうした中、協会の切なる懇請に応え、山岡浩二郎氏の格別のご厚意で、当時、市内高田町長浜電報電話局の裏にあった私有地をテニスコート用地として、長浜庭球協会を経て長浜市教育委員会に無償でご提供して頂き、ここに会員待望のテニスコートが出来た運びとなったのである。建設に当たっては、市ご当局のご配慮に加え、会員の労力奉仕による汗の結晶もあつて、一九五一年（昭和二六）秋、見事二面のコートが長浜市民コートと冠し完成した。

同氏の「社会人のふれ合いの場、スポーツの殿堂として、また、湖北一市三郡の青少年の健全な育成のため」というご趣旨により、湖北一市三郡の中学校、高等学校が当協会の加盟団体になったのも、この時機からである。

一九五二年（昭和二七）、このテニスコートの完成を祝し、併せてこの年発効された講和条約を記念して、第一回ヤンマー杯軟式庭球大会を開催、更に後年、ヤンマー杯壮年大会（現、壮年・レディース大会）が催され今日に至っている。

また、このテニスコートでは、県体をはじめ各種多くの大会がもたれたが、テニスのみならずスポーツ施設そのものが皆無の時代であつただけに、思い出の多いコートであつた。

一九六二年（昭和三七）、長浜電報電話局の増築のため、同テニスコートを譲渡する事となり、同地寄贈時のヤンマーデイズェルと市当局の覚書に従い、代替として現在の豊公園内に移設されたのである。その後、このテニスコートの名称は「長浜市民庭球場」と改称され、全国高校総体、全国実業団大会、びわこ国体をはじめ数知れぬ大会が開催されている事は周知のとおりである。

このようにして、長浜ソフトテニス協会は、この長浜市民庭球場の歴史と共に歩み、われわれ協会員は栄光ある協会から蔭陽に亘り、大きな恩恵に浴している。偏えに協会の始祖ともいべき大恩人の山岡浩二郎氏のお蔭である。

われわれ協会員は、各諸先輩の教えを守り、この事を永く後輩に語り伝え、テニスコートに立つ時、いつまでも感謝の気持ちを持ち続けたいと希うものである。

平成六年一月

前河 敬造



前河敬造氏作の銘板

ヤンマー杯近府県軟式庭球大会

ここで銘板にも記されているヤンマー杯のことについて書きとめておこう。昭和二十七年（一九五二）は連合国とのあいだに講和条約が締結された年でもあった。そこで新設されたテニスコートの完成を祝い、併せてこの年発効された講和条約を記念して、ヤンマーが主催となつて、軟式庭球大会が開催されることになつたのである。

すると蓋を開けてみて驚いた。何と、この周辺の人たちだけではなく、県外からも多数のテニスマンが参加申し込みをしてくるではないか。

そこでこの大会を協会の年度行事として恒例化、やる以上は県内にとどめず、広く他府県にも呼びかけて、軟式テニスの振興と、地域間の親善にも役立てようと考え、私はヤンマーが後援するからと提案し、第二回からの大会を、「ヤンマー杯近府県軟式庭球大会」と称することにしたのである。

この間、昭和四十二年（一九六七）の第十六回大会からは、日本テニス界に尽くされた清水善造さんの偉大な功績を讃えて、準決勝戦以上に勝ち進んだ選手のなかから、技量、マナーともに秀でた優秀なプレイヤー一人を表彰する「清水善造杯最優秀選手賞」を設けたり、女子部、壮年部といった種目を増やす等、大会はいつそう充実したものとなつた。

ついでながら、清水善造さんとは、大正時代、軟式から硬式に転向した日本テニス界を代表するプレイヤーで、大正十年（一九二一）のデビスカップ戦で、時のテニス王チルデンが足を滑らせ転倒した際に、ポイントが取れるのにゆるい球を返したことが美談となり、スポーツマンシップの手本として高く評価され、教科書にも載つた方である。

ヤンマー杯の大会にはじめてご招待したときは、すでに七十歳に近かつたがすこぶる元気で、独特の話術でテニスの真髓を語り、また、私たちとの模範試合を通じて、身をもつてそのことを示された。特に印象深く今も思い出されるのが、「和気集庭」（和やかな気分で皆が集まりテニスを楽しむ）という言葉で、同氏の達筆な直筆を印刷して扇子をつくつたところ、大会参加者からもたいそう喜ばれた。

このヤンマー杯も順調に推移し、平成四年（一九九二）からは軟式庭球をソフトテニスと改称して今にいたっているが、ただ一つ残念だったことは、昭和六十年（一九八五）に入つて世間に不況風が吹き、ヤンマーでもその対策の一環とし

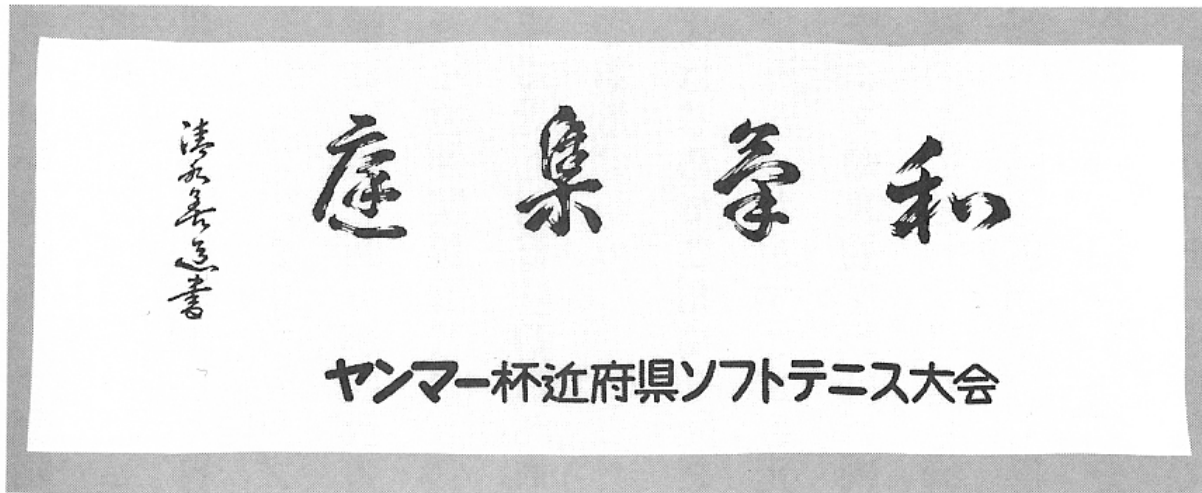
て経費節減を厳しくした折、こともあろうか、このヤンマー杯にたいする援助金まで打ち切ってしまったことであつた。いくら経費節減とはいえ、わずか数万円のことではないか。安易に切つたとは思いたくないが、本社・工場の幹部たちがつとこの大会発足時の精神と趣旨を理解していたなら、孫古社長の郷土を愛し、地方社会との融和をはかる精神を身につけていたならば、こういうみつともないことはなかつたと思う。



身ぶり手ぶりで熱のこもった挨拶をされる清水善造氏

ヤンマーから連絡を受けて当時協会員だつた前河氏がすつとんで来られ、「この大会をやめることなんてできません。何とかならんでしようか」といわれたときには、さすがに私がつくりした。「神崎工機はヤンマーほどには出せないが、援助金とカップを提供しましょう」ということで、昭和六十一年から六十三年までの三回は、「山岡浩二郎杯」でこの大会を継続することにし、関係者にたいへん喜んでもらった。

そうこうするうちにヤンマーの不況対策も一段落し、景気も回復してきたので、私は担当の常務にあつて話をし、本来のヤンマー杯にもどしてもらつた。孫古社長の魂が蘇つたということ、私もこれで一安心したが、どこかやりきれなさのようなのが心のどこかに残つたというの、今もいつわらざる私の心境だ。



清水善造氏の書



ヤンマー杯近府県ソフトテニス大会後の役員との夕食懇親会

戦後すでに半世紀を経たが、私は今でも都合のつくかぎりこの大会に顔を出し、その夜は幹部の方々と慰労を兼ねて懇親の夕食会を催している。長浜の地元の人々と親しく旧交を温めあえることは、「美しき世界は感謝の心から」といわれた孫古社長の精神に応えられていることだと、ほんとうに心からうれしく思っているし、私自身にとつて、長浜がたいせつなわが心の故郷のひとつであることにかわりがない。

長浜工場随感

ヤンマー杯中断のことは一例に過ぎないが、私は近年、ヤンマーとくに長浜工場の地域社会との交流の在り方が、たいへん気になっている。もともとここは、初代孫吉社長が郷里に工場用地を求め、昭和十七年（一九四二）に休業同然だった長浜チリメンの織物工場を買収し、現在の長浜工場の基をつくられたのだった。

戦後、孫古社長は私に、「湖北は冬場の雪の影響で貧しい農家が多い。この人たちのためにわしは仕事をもってくるんや。どうせ都会は、労働組合運動が強くて仕事にならん。長浜を中心にやろう」といわれた。私も、「わかりました。やりましょう」と、次々に分工場をつくり、かつてチリメン業に携わっていた多くの人たちに、ヤンマーで仕事をしてもらうことにした。

これは元を正せば、孫古社長の郷土愛から出たものであるが、歴史的観点からみれば、地場産業として零細なチリメン業しかなかった湖北に、機械製造という新しい産業をもたらした産業構造の大きな転換であった。郷土を愛し、湖北の発展とヤンマーの繁栄を願う孫吉社長は、再三述べたように地域社会との融和をたいせつにし、長浜にあれば多くの人たちにあつて話を聞き、学校がピアノを欲しいといえればピアノを寄付する、こうしたことには金があるといえれば寄付をする、そして一人ひとりの訴えを相手の立場に立って聞かれた。こうして戦後、長浜工場は地域とともに発展した。



長浜小学校に寄贈された孫吉社長のピアノ開き
(演奏するのは山岡浩二郎の長女 悦子)

ところが近年はどうだろうか。その後の長浜工場の幹部の全部が全部ということではなく、また、そんなことをいったとはあえて思いたくないが、「経費節減だからそんなもんあかん、帰れ、帰れ」というようなことが多かつたのではないだろうか。心から地域を愛し、感謝の気持ちがあるならば、もうすこし言い方もあるのではないかと思う。地域あつてのヤンマーであることを、今一度肝に銘じてもらいたいものだ。

東阿閉会館建設のこと

最後にもうひとつ、孫吉社長の思い出として語っておきたい。

たしか、私が長浜工場長になる直前の昭和二十六年（一九五二）の暮れか、二十七年の初めの頃だったと思う。

「浩二郎、わしは今、この物心ともに混乱して希望を失っている時代に、阿閉の皆さんに何か活力と自信をもってもらうためにも、老若男女を問わず、すべての人たちが和気あいあいと集まれる公民館でも建ててあげたら、と思うとるんやが」と、孫吉社長から相談されたことがあった。

「建てるからには単なる集会所ではなく、測定機を入れて、精密測定の研究所をつくつたらどうでしょう。」

「それはおもしろいな。」

「あのあたりは雪が多いし、農業だけでは儲からんから、精密測定機を入れて、若い人たちに測定をやってもらったら勉強にも励むだろうし、さらに勉強したい者は大学も目指すでしょう。」

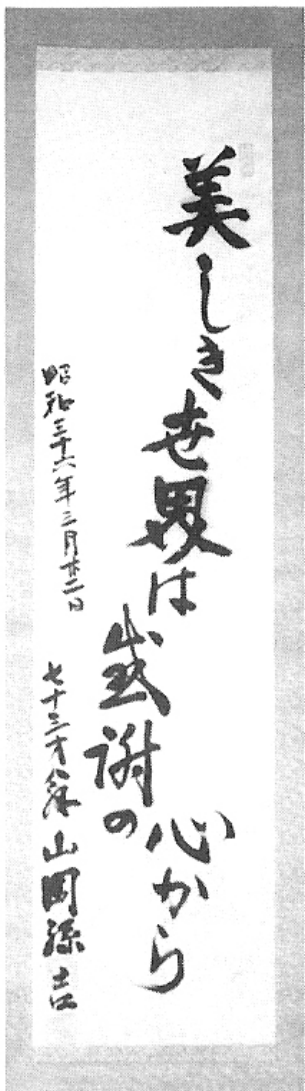
建築は当時ヤンマーの施設部長だった西村九郎君が担当、具体化することになった。折から昭和二十八年二九五三）二月には孫吉社長を先頭に、私もふくめて主力メンバーは欧州にエンジンの視察に出かけ、欧州諸国でいろいろな建築物を見る機会に恵まれた。

区役所のような建物にも、みな屋根の上に塔がそびえている。教会の窓には美しいステンドグラスがいっぱい入っている。阿閉に会館を建てるからには、みんなに親しまれ後世に永く残るものにしたいが、それにはヨーロッパ風の建物がいなあとということになって帰ってきた。



東阿閉会館の全景

もどつてみると、建築はだいぶ進んでいたが、上層部をちょん切つて塔をつけようなどと大騒ぎになつて、結局は数年がかりで研究もし、施工にも時間をかけて、昭和三十三年（一九五八）秋になつてようやく完成した。建物の構造、デザインとしては耐震、恒久的な鉄筋コンクリート造りとし、外観は欧州でみたもののうち、もつとも印象的だつた高い塔屋の聳えるゴシック風にするこゝとし、あれこれ検討した結果、最終的にストックホルムのシテイホールに似たものとなつた。



孫吉社長自筆の掛軸(孫吉社長逝去1年前に書かれたもので、向陽館(現紅梅荘)奥座敷に掛けられている)

私が忘れられないのは、このときの孫吉社長のたいへんな熱の入れ方だ。故郷に対する愛がどれほど深いものか、どれだけ地域の人々の生活のことを考えておられたか。少なくとも私の目が黒いうちは忘れることはない。

孫吉社長は日頃から「人生というものは運、不運に左右されることは大きからうが、どんなばあいでもつねに誠実さと感謝の心を失わないで努力しておれば、よき協力者を得て道も開け、入から感謝されて、美しい世界が自ずから開けてくるものだ」と、いわれ、そこから「美しい世界は感謝の心から」という座右の銘が生まれた。

そして何よりもまして故郷を愛し、湖北の発展に情熱を燃やされた。また、たくさんの人が工場に来てくれていたので、この地に何か報いたいといっておられた。東阿閉会館はその感謝の心の表現だったろう。地域社会との融和をけっしておろそかにしてはなるまい。孫古社長の遺志にそむいてはなるまいと私は固く心に決めている。

社名のディーゼルについて

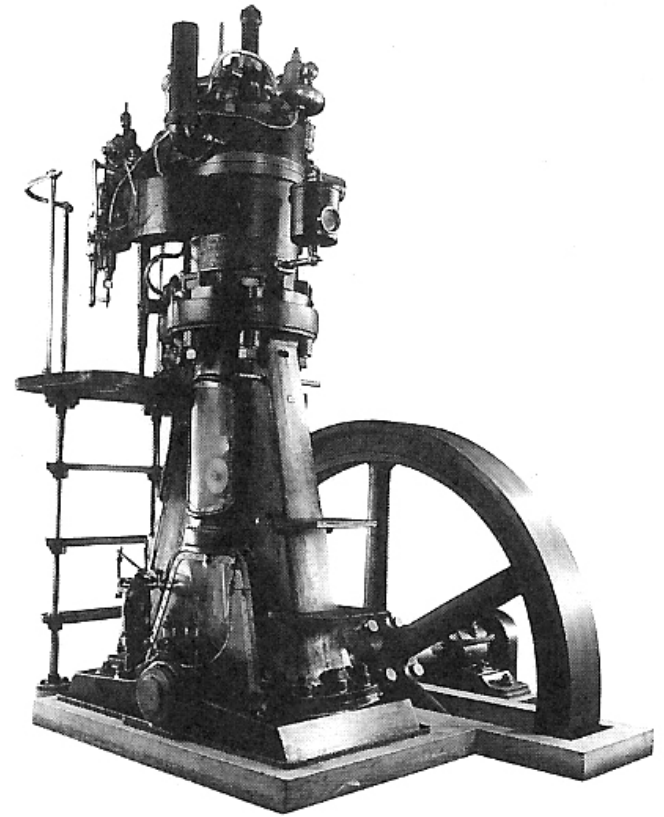
「ヤンマーディーゼル」という社名は、昭和二十七年（一九五二）に「山岡内燃機株式会社」から、初代孫吉社長がみずからの意思で改称されたものである。だが、私自身、孫吉社長がどういう理由で「ディーゼル」とつけられたか、その真意がわかったのは、昭和二十九年（一九五四）にディーゼルエンジンの発明者、故ルドルフ・ディーゼル博士の子息オイゲン・ディーゼル博士が来日され、折から病の床にあつた孫吉社長を見舞われたそのときであつた。その場の同席者は私を除いて皆故人になつてしまつたので、その経緯を知るものは今では私一人になつてしまつた。



ルドルフ・ディーゼル博士

ディーゼルエンジンは、フランス生まれのドイツ人ルドルフ・ディーゼルによつて考案され、その後急速に発達した。ルドルフ・ディーゼル博士はミュンヘン工科大学に学び、卒業論文で『合理的な、内燃機関の設計』を書

くなど内燃機関の研究に没頭、一八九三年『合理的熱機関の理論と構造』でディーゼル機関の原理を発表、机上の空論とまでいわれたきびしい世評に屈せず試作に試作を重ねて、九八年ミュンヘンで最初の機関を公表して実用化に成功、一躍世界の注目を浴びた。ディーゼルエンジンとは、このときから発明者の名をとつてつけられた名前であるが、これはまさにドイツ人固有の合理主義に基づいて発想された成果であつた。



ルドルフ・ディーゼル博士が製作した世界最初のディーゼルエンジン

の高い内燃機関ができると考えた。また燃料は、ドイツが石油資源に乏しいことから石炭の活用を考え、微粉炭の使用を試みた。

このように、博士は燃料の使用量が多くしかも熱効率のわるい蒸気機関や、従来の内燃機関にかわる動力源の必要性に着目、当時省資源の必要に迫られていたドイツの国策に沿って、内燃機関の研究開発に没頭、ついに成し遂げたのである。合理的内燃機関と称する所以である。

来日されたオイゲン・ディーゼル博士は、脳溢血で倒れ自宅で静養中だった孫吉社長を訪ね、孫吉社長がドイツのアウグスブルグ市ウイッテルバッツハ公園内に寄贈された、「ディーゼル記念石庭苑」のお礼などを申された。この「ディーゼル記念石庭苑」というのは、ブラジルヤンマーのところでふれた例の日本式庭園のことである。

さて、オイゲン・ディーゼル博士が来訪されたその日であった。孫吉社長は朝からふだんとは見違えるような緊張した面持ちで、そわそわと落ち着かない様子だった。そして、オイゲンさんと顔を合わすなり、開口いちばん、「私はルドルフ・ディーゼル博士の功績を讃え、この由緒あるディーゼル家の心を後世に伝えたい一心から、無断で社名にディーゼル家の家名をつかわせていただきました。このことがいつも気がかりになっていたのですが、この際あなたにお詫びを申しあげ、

ディーゼル博士は、空気が圧縮によって赤熱化することを利用し、この高熱で燃料を燃やせば複雑な点火装置は不要になり、しかも熱効率

何とかお許しをえたいと思います」と、深々と頭を下げられたのである。このときの挨拶で、孫吉社長がルドルフ・ディーゼル博士の偉業を讃えるとともに、その時代のニーズに沿った「合理的な原動力」をつくるという信念をこめて、ディーゼル博士の家名を社名に使った真意を私たちはほんとうに知ったのだった。



オイゲン・ディーゼルご夫妻(西宮市甲子園の孫吉社長宅にて)

オイゲンさんは、思いもよらぬ孫古社長の冒頭のこの言葉にたいへん驚かれた様子であったが、「いやいや光栄の至りです。どうぞお気遣いなくお使いください」と心から喜んでくださった。そのうえ、「あなたこそが父の意志を継いでくださる方だ。父の遺品は私が持っているよりも山岡さん、あなたに持っていたほうがふさわしい」と言って、ディーゼル博士が生前愛用されていたワイングラス、インクスクन्द、ステッキといった遺品の数々を、孫吉社長に贈られたのであった。

ところで、近年、巷では、NO_x、がどうだこうだといろいろやかましいようである。しかしこれは不合理なエンジンをつくっているからであって、NO_xの出ない合理的なエンジンをつくるこそが研究開発の最重要課題であろう。私はこことあるごと、研究開発にたずさわる技術者諸君に、毎日最低三十分は燃焼問題を考えるといっているが、果たしてやっているだろうか。おまけに驚いたことには、世間のNO_x論議にかまけて、ヤンマー社内で、社名の「ディーゼル」は会社のイメージをわるくするからこれを取り除いてはどうかという意見が、何も知らない若手社員から出ていることである。とんでもない話である。今こそ初代社長が社名に選ばれた意を体して、この社名に誇りと自覚を持ち、徹底して燃焼問題の研究に取り組み、時代のニーズに沿った今の世代にふさわしい、合理的エンジンの開発に邁進すべきではないか。

そういえばルドルフ・ディーゼル博士がパテントを取得してから百年目にあたった一九九三年には、これを記念して、米国の有名なディーゼルエンジンメーカーであるカミンズ社の創業者の一族であるライル・カミンズ氏が、七百数十ページにおよぶくわしい『ディーゼル』という本を出版した。私もいささかの援助をしたが、ルドルフ・ディーゼル博士の真の価値を知る人は多いのである。

私はオイゲン・ディーゼル博士が孫吉社長を見舞われたときの写真を見るたびに、社名にディーゼルとつけられたときの決意を思い出さずにはいられないのである。

■本人の主な履歴

大正七年(一九一八)

1・3 大阪市東区東高津北ノ町七十六番地(現在の大阪市天王寺区)で父川崎貞一、母ことの二男として出生。父は東京高等師範を出て中学校の英語の教師をしていたが、その後、小学校の校長を永く勤めた。

■社会のできごと

8・ 富山県で米騒動、全国に波及。
9・ 原敬内閣成立。

昭和五年(一九三〇)

3・ 大阪府天王寺師範附属小学校卒業

1・ 21 ロンドン海軍軍縮会議開く。日本、ロンドン条約に調印(4・22)

昭和十年(一九三五)

3・ 大阪府立今宮中学校卒業。

2・ 湯川秀樹、中間子論を発表。

昭和十四年(一九三九)

3・ 大阪高等学校理科乙類卒業。

5・ ノモンハン事件起こる。

昭和十六年(一九四一)

12・ 26 大阪帝国大学(現在の大阪大学)工学部機械工学科卒業。
山岡規志子と結婚、山岡姓を名乗る。

4・ 日ソ中立条約調印。
12・ 8 ハワイ真珠湾攻撃開始。

昭和十七年(一九四二)

1・ 5 山岡内燃機(株)(現在のヤンマーディーゼル)に入社。
1・ 20 海軍に応召。海軍技術中尉に任官、呉海軍工廠造船部に勤務。当時、呉海軍工廠は各工廠のなかで最も科学的管理法の進んだところで、ここでの経験が後の経営管理法実践の上で大いに役立った。

5・ 企業整備令法公布。
6・ 5 ミッドウエー海戦。
6・ 山陽本線開門トンネル竣工。

昭和二十年(一九四五)

10・ 終戦により技術大尉で復員。ただちに山岡内燃機(株)に復職。
同社長浜工場で小型ディーゼルエンジンの生産再開に奔走する。

8・ 15 日本、ボツダム宣言受諾、無条件降伏を発表。
9・ GHQの管理下で、存続を許される製造工業の規模が明確化。

昭和二十七年(一九五二)

4・ 1 ヤンマーディーゼル(株)長浜工場長。
新商品の開発、設備の近代化と生産技術の向上に努め、ディーゼルエンジンの量産工場としての体制を確立した。この多量生産の功績により、昭和三十一年四月、同工場は大河内記念生産賞を受賞。

4・ 28 対日平和条約・日米安全保障条約発効。
5・ 1 血のメーデー事件。

昭和三十一年(一九五六)

4・ 18 同社取締役製造部長。海外事業部長・長浜工場長を兼任。
製造部門全般を統括するかたわら、海外直系会社の「ヤンマーディーゼル・ド・ブラジル・リミタード」の発足(昭和三十一年四月)と工場建設を手掛けた。
5・ 30 ヤンマーの役員兼任のまま(株)神崎高級工機製作所代表取締役社長に就任。同社はそれまで工作機械の製

5・ 日本登山隊、ヒマラヤのマナスル初登頂。
10・ 日ソ国交回復に関する共同宣言。
12・ 国連総会 日本の国連加盟を可決。

■本人の主な履歴	■社会のできごと
<p>昭和三十三年（一九五八） 四十歳</p> <p>造・修理、治工具の製作、ヤンマーのエンジン部品の製造などを行なっていたが、社長就任と同時に、機械要素として重要な部品である歯車は品質・性能・コストの面から集中生産をするべきであるとの理念から、ヤンマーグループ各社・各工場それぞれに製造していた歯車を同社で集中生産することとし、これと工作機械を事業の二本柱として会社を再出発させた。</p>	<p>5・ 7</p> <p>テレビ受信契約数100万突破。</p>
<p>昭和三十五年（一九六〇）四十二歳</p> <p>1・ 8 ヤンマーディーゼル(株)常務取締役就任。 5・ 31 紺綬褒章受章（寄附行為功労）。</p> <p>昭和三十六年（一九六一）四十三歳</p> <p>6・ 21 ヤンマー農機(株)発足により同社取締役兼任。</p> <p>昭和三十八年（一九六三）四十五歳</p> <p>10・ 31 ヤンマーディーゼル(株)専務取締役就任。昭和四十五年五月まで在任、以後取締役。 この間、昭和四十一年に、ヤンマーでは品質管理の全社的運動として「総合的品質管理 (TQC)」を導入。これを「YANMAR QUALITY MANAGEMENT」と称して展開するようになった。そのYQM推進本部の副本部長として、自己の経営理念である「ダイナミック・マネジメント・オブ・Q」を指針として、ヤンマーグループ全体の全社的総合品質管理の推進を指揮し、昭和四十三年十一月エンジン業界では初めて品質管理の最高の栄誉である「デミング賞実施賞」受賞の原動力となった。</p>	<p>5・ 6</p> <p>日米相互協力および安全保障条約発効。 ケネディ、米大統領に当選。 池田内閣、所得倍增計画を決定。</p> <p>6・ 11</p> <p>ケネディ、米大統領に当選。 池田内閣、所得倍增計画を決定。</p> <p>12・ 8</p> <p>ケネディ、米大統領に当選。 池田内閣、所得倍增計画を決定。</p>
<p>昭和三十九年（一九六四）四十六歳</p> <p>7・ 5 日本生産性本部、生産性関西地方本部、関西IE協会共催「第1回ジョージア工科大学IE研修団」の団長として訪米（8・28）。</p> <p>同大学IE学部長R.N. Lehrer博士の指導のもとで、「Modern IE」を研修し、従来のTraditional IEの技法にOR・シミュレーションなどの経営科学、コンピュータなどを手段として活用する現代の新しいIE「Modern IE」を日本に導入。</p>	<p>9・ 16 第2室戸台風、近畿中心に猛威。</p> <p>11・ 22 ケネディ米大統領暗殺される（初の日米間宇宙中継実験放送で受信）。</p> <p>4・ 10</p> <p>日本、IMF（国際通貨基金）8条国に移行。 東海道新幹線開業。 東京オリンピック開催。</p>
<p>昭和四十一年（一九六六）四十八歳</p> <p>12・ 21 ヤンマー農機(株)専務取締役に昇任。総合技術研究所長となる。</p> <p>以後昭和四十五年五月までヤンマー農機(株)役員として九年間、同社発足時の経営基盤の確立から、初代総合技術研究所長として農業機械開発の重責を果たした。</p> <p>またこの年、神崎高級工機の経営の第三の柱として農業機械分野への参入を決め、ヤンマーブランドの農業機械のトランスミッションの製造を開始、現在</p>	<p>5・ 5</p> <p>中国文化大革命始まる。 景気上昇(いざなぎ景気) 航空機事故相次ぐ。全日空ボーイング727型旅客機、羽田沖に墜落(2・25)。カナダ航空DC8炎上(3・4)。BOACボーイング707型機富士山付近で墜落(3・5)。</p>

■本人の主な履歴	■社会のできごと
<p>昭和四十五年（一九七〇）五十二歳</p> <p>5・30 梶昌運工作所代表取締役社長兼任。 社長就任以来、同社が誇る旋盤技術を基盤として、徹底したユーザー指向のもとに、使用目的にあった工作機械の開発を強力に推し進めた。（平成五年三月より代表取締役会長に就任、現在に至る。）</p>	<p>3・14 日本万国博覧会EX'70開幕。 3・31 日航機と号ハイジャック事件発生。 11・25 三島由起夫自刃。</p>
<p>昭和四十七年（一九七二）五十四歳</p> <p>5・25 工学博士の学位を受ける（大阪大学）。</p>	<p>2・19 連合赤軍が浅間山荘に籠城。 6・ 田中角栄「日本列島改造論」を発表。 9・ 日中国交正常化。</p>
<p>昭和四十八年（一九七三）五十五歳</p> <p>10・24 通商産業省産業構造審議会専門委員に就任（昭和五十一年十一月まで三年間）</p>	<p>2・ 日本外国為替相場、変動相場制へ移行。 10・ 第1次オイルショック。</p>
<p>昭和五十年（一九七五）五十七歳</p> <p>2・1 関西情報センター主催「コンピュータリゼーション視察団」に団長として訪米（26）。米国のコンピュータ活用の実態を視察・研修し、日本の将来の経営システム、情報処理のあり方を探る。 5・21 関西経済情報科学協会（現・関西経営システム協会）副会長就任。現在に至る。 6・1 日本インダストリアル・エンジニアリング協会副会長就任。（平成元年五月まで十四年間）</p>	<p>3・ 新幹線岡山―博多間開業。 4・ ベトナム戦争終結。 7・ 沖縄海洋博覧会開催。 19・30</p>
<p>昭和五十二年（一九七七）五十九歳</p> <p>7・20 運輸省大臣表彰受賞（船舶関係事業の振興発展功労）。</p>	<p>9・8 気象台、初めて静止衛星ひまわりからの地球画像を受像。</p>
<p>昭和五十四年（一九七九）六十一歳</p> <p>11・2 藍綬褒章受章（工作機械業界の振興発展功労）。</p>	<p>3・ イスラエルとエジプト、平和条約に調印。</p>
<p>昭和五十五年（一九八〇）六十二歳</p> <p>7・8 関西経営情報科学協会主催「八〇年の経営」海外チーム副団長として訪米（22）。米国が構築しつつあった八〇年代の経営スタイルを視察。</p>	<p>9・ イラン・イラク両軍が交戦、全面戦争に突入。</p>
<p>昭和五十六年（一九八一）六十三歳</p> <p>5・28 社団法人日本工作機械工業会副会長就任。 同工業会が「社団法人」に改組される以前の昭和四十六年から理事、その間、昭和四十八年五月～五十年五月の二年間は副会長を務め、改組と同時に新組織の下で再度副会長に就任。六十二年五月まで六年間の副会長任期中、技術委員長や国際委員長を歴任、現在も理事として日本の工作機械業界の振興に微力を尽くしている。</p>	<p>3・20 神戸ポートピアアイランド博覧会開催。 10・ 福井謙一ノーベル化学賞受賞。</p>
<p>昭和五十九年（一九八四）六十六歳</p> <p>7・20 関西経営システム協会主催「二十一世紀へ向けての経営戦略と経営・情報科学の動向」視察団団長とし</p>	<p>6・ 平均寿命、男女ともに世界一となる。 11・1 新札発行1万円札（福沢諭吉）、50</p>

■本人の主な履歴

て訪米（5・8・7）。
米国における高度情報化時代の経営戦略と経営システム、ニュービジネスの動向、日本の進出企業の実態と将来展望および大学・研究機関の経営・情報化の理論とその応用、今後の展望について視察。

■社会のできごと

00円札（新渡戸稲造、10000円札（夏目漱石）。

昭和六十一年（一九八六）六十八歳

5・28

(独)日本歯車工業会会長就任。現在に至る。
中小企業が大半を占める歯車業界にあつて、各企業の経営体質の強化を図るなど業界の振興発展に努力している。とくに近年では国際化時代への対応として、日本、米国、欧州三地域の業界代表者による「世界歯車サミット会議」の開催に主導的な役割を果たし、友好的な対話による国際協調に努めている。

2・
4・26
フィリピン、アキノ大統領就任
ソ連、チェルノブイリ原発、史上最悪の事故発生。

平成元年（一九八九）

七十一歳

5・18
7・1
通商産業大臣表彰受賞（歯車製造業界の振興発展功労）。
タフトルク・コーポレーション取締役会長兼任。
その後開発したIHT (Integrated Hydrostatic Transaxle)が海外でも高い評価を受け、特に芝刈機で需要の大きな米国市場に安定供給するため、ヤマダグループ初の米国生産拠点として平成元年、テネシー州モーリスタウン市に現地法人の子会社「タフトルク・コーポレーション」(TUFP TORQ CORPORATION)を設立。
11・3
勲四等旭日小綬章受章（産業振興功労）。

1・7
4・1
7・6
7・
昭和天皇崩御、元号を平成と改元。
消費税3%課税実施。
中国、天安門事件発生。
参議院議員選挙で、与野党の議席数逆転。

平成四年（一九九二）

七十四歳

5・25
通商産業大臣表彰受賞（工作機械業界の振興発展功労）。

6・
6・
P K O協立法成立、自衛隊員がカンボジアへ。
ブラジル、リオデジャネイロで地球環境サミット開催。

平成五年（一九九三）

七十五歳

3・21
朝昌運工作所代表取締役会長就任。現在に至る。

7・
9・
北海道南西沖地震の津波により、奥尻島に被害。
コメの空前の不作。

平成七年（一九九五）

七十七歳

6・18
朝神崎高級工機製作所代表取締役会長・社長就任。現在に至る。

1・17
3・
阪神・淡路大震災、神戸市を中心に阪神間に被害甚大。
東京の営団地下鉄でサリン事件発生。

あとがき

思い立って、折にふれて書きとめていたものを整理してみたら、とうとう一冊分の量になってしまった。すべては本文中に記したとおりだから、あらためてここに書き足すことはもうない。

ただ、まとめ終えた今、しきりに思われるのは、かつてひとつ屋根の下で同じ釜の飯を食った大阪高等学校時代の寮生仲間のことである。競って哲学書や内外の小説を読みあさり、夜遅くまで、時には夜が白むまで酒を汲みかわしながら、純粋な心で国家存亡から恋愛論にいたるまで議論を戦わしたことは、忘れ難い青春時代の充実した一時期であった。

それだけに、いまつくづく感じることは、私の人生観なり、ものの見方、考え方の根底に流れているものは、この寮生時代に培われていたんだなということである。「三つ子の魂百まで」ならぬ「大高寮八十まで」である。

私は、今でも美しいものを見て美しいと感じる心をもっている。美しいものを見て美しく感じないのは、たとえ年若くとも既に老化しているのである。こうした心も、みんなと語り合った寮生時代に私の心に植えつけられたと思っている。

そんなわけで、本の題名として私のいまの気持にぴたりとするいいものがなかなか決まらなかったが、過ぎし日がそうであったように、今も青年の心意気で過ごしていることを考えれば、当たるとも遠からずと自認し、「わが青春の譜」とした。私の意とするところを、お汲み取りいただければ幸いである。

一九九七年五月

山岡浩二郎